

お酒、くすり、ギャンブル等、インターネット・ゲームに関する意識行動調査結果報告（概要）

○調査概要

調査対象

堺市在住の15歳以上5,000人（居住区、性別、年齢層別に無作為抽出）

調査期間

令和2年11月1日～令和2年11月23日

回収状況

有効回答数 2,212通/5,000通 有効回答率 44.2%

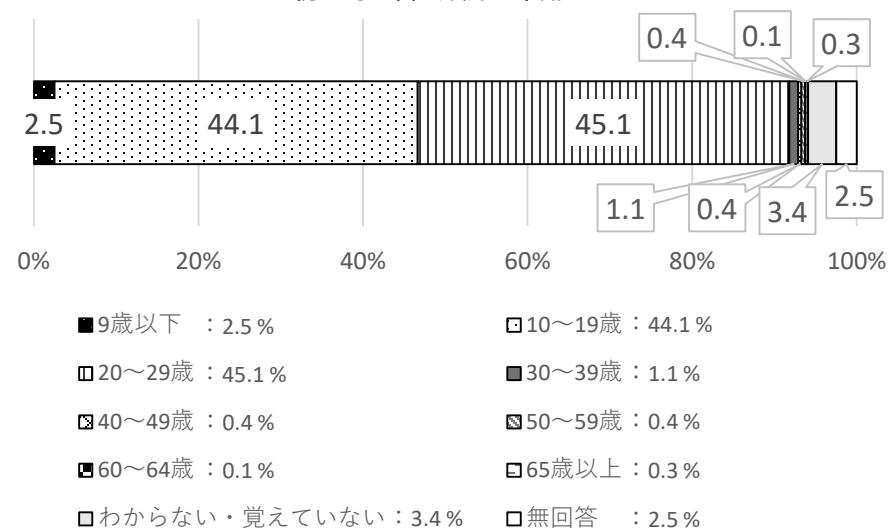
※自殺に関する調査（こころの健康といのちに関する意識調査）と同時に実施
同じ対象者に2つの調査を同時に実施した

○調査結果

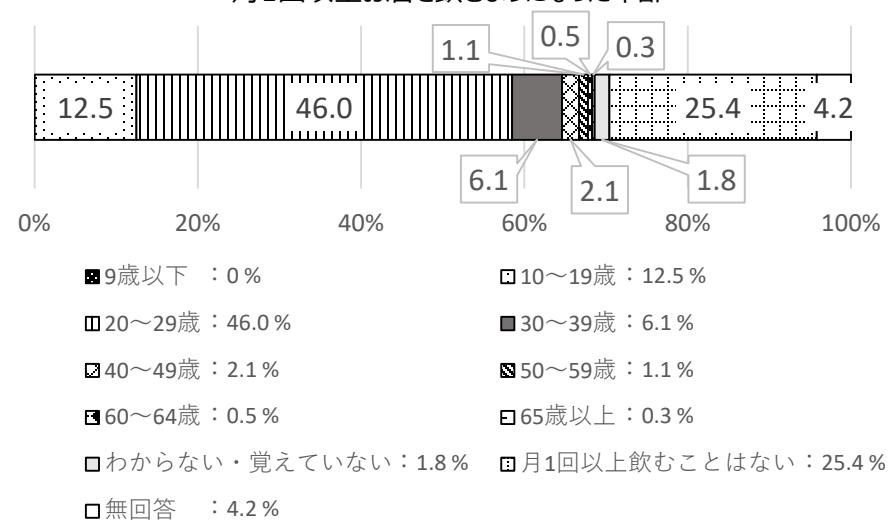
<アルコールについて>

- ・半数近くが10代で飲酒を経験し、12.5%が10代で月1回以上の飲酒をしている
- ・飲酒によって起こる問題として知っているものについて、「依存症」は90.4%と高かったが、飲酒と関連の深い「自殺」（13.5%）「うつなどこころの病気」（15.7%）の認知度が低かった。

初めてお酒を飲んだ年齢



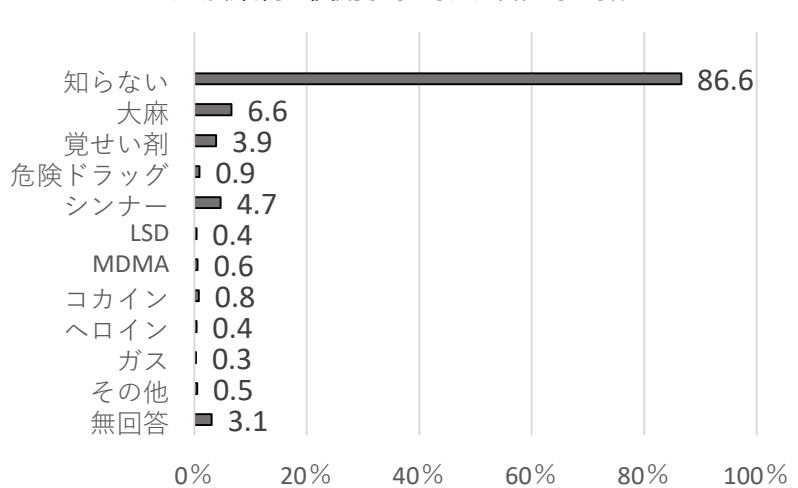
月1回以上お酒を飲むようになった年齢



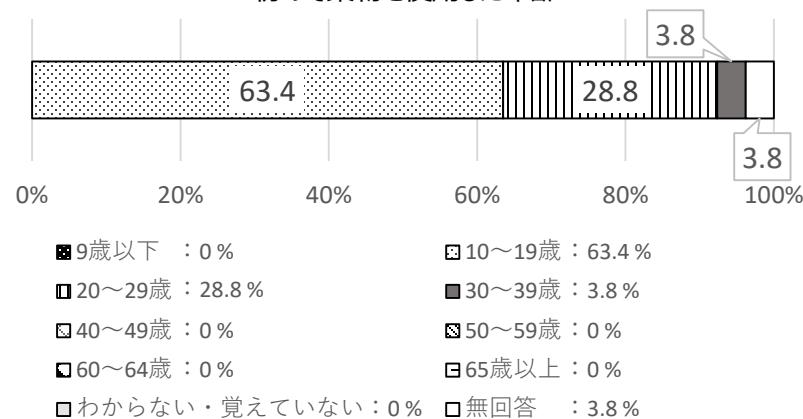
<薬物について>

- ・10人に1人が「違法薬物を使用している人を知っている」と回答
- ・薬物使用の勧誘をされた経験（4.2%）、使用経験あり（2.5%）
- ・使用経験者の開始年齢は10代で63.4%

違法薬物を使用している人を知っているか



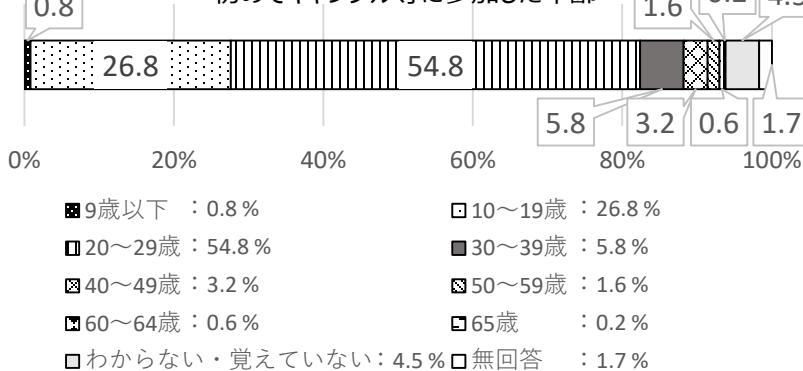
初めて薬物を使用した年齢



<ギャンブル等について>

- ・約7割がギャンブル等経験あり（パチンコ・スロット、宝くじを含む）
- ・開始年齢は男性で15～19歳が35.1%、頻度は週3回以上が2.8%
- ・1か月の使用金額で5万円以上使う人が2.7%

初めてギャンブル等に参加した年齢



<インターネット・ゲームについて>

- ・1日のネット使用時間が6時間以上が8.9%、
- ・平日のゲーム使用時間が6時間以上が1.3%
- ・ゲームによって何らかの問題が生じたことがある人27.7%

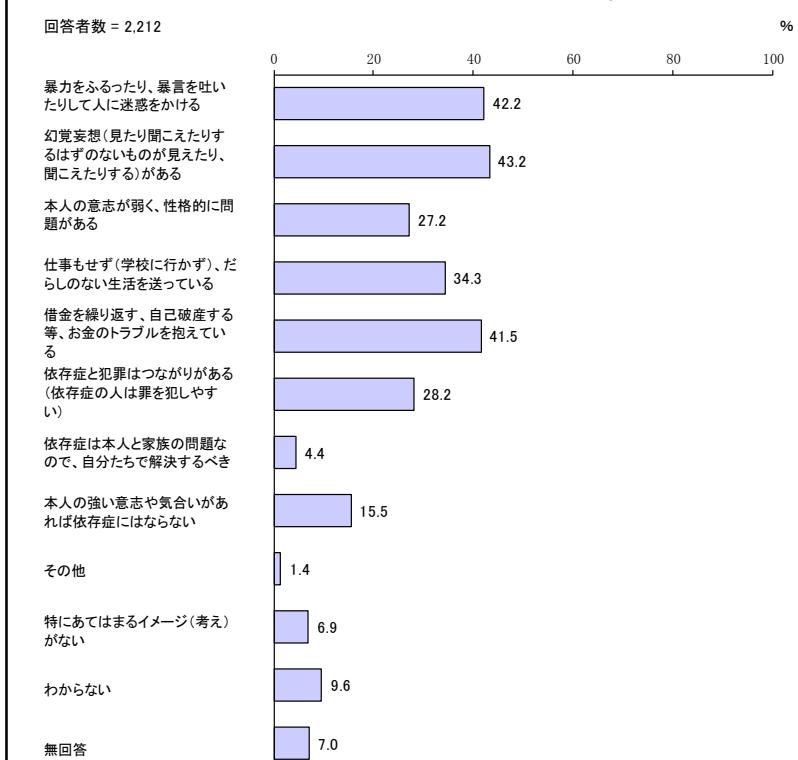
<新型コロナウイルス感染症の影響について>

- ・アルコール、薬物、ギャンブル等については大きな変化はないが、ネット・ゲームについては増加した割合が23.6%
- ・特に年代が若くなるにつれ増加割合が高い（10代は約50%の増）

<依存症全般に関する市民の考え>

- ・依存症のイメージについて「本人の意志が弱く、性格的に問題がある」27.2%、「本人の強い意志や気合があれば依存症にならない」15.5%
- ・「相談できる場所を知らない」「わからない」が25.5%

依存症に対するイメージ（複数回答）



○調査結果からみえてきた課題

正しい知識、情報の普及の必要性

- ・アルコールや薬物、ギャンブル等、ネット・ゲームなど市民にとって身近なものとなっている反面、依存症に対する正しい知識や情報が十分いきわたっていない。若い世代への予防教育も必要である。

早期発見・早期治療のための支援体制等充実の必要性

- ・依存症への誤ったイメージや偏見があること、依存症の支援機関の周知等が十分でないことで本人・家族が治療や相談につながりにくい。
- ・医療、相談、自助団体等の支援体制の充実と周知が必要である。

関係機関等の連携強化の必要性

- ・依存症のリスクがある人は複合した課題を抱えている可能性が高く、様々な関係機関と連携し、支援していく必要がある。